

誤

46) 複数介助者で実施する車椅子移乗方法の検討 —第二報

○中山麻由¹，加悦美恵¹，森本紀巳子¹
¹久留米大学医学部看護学科

【目的】

我々は、これまでに介助者二人で療養者をベッドから車椅子へ移乗する方法を検討してきた。今回は、移乗時の心拍数の変化から身体的負担の少ない方法について考察する。

【方法】

対象は、患者役を女子看護大学生11名、介助者役は女性看護師8名とし、看護師は二人一組となって複数回実験に参加した。データは11回組分を収集した。方法は、二人の看護師が主介助者、副介助者となって、自力で立てない患者を端座位から車椅子へ移乗する場面とし、患者を前後から支える前後支持法と、患者の左右両側から支える左右支持法の2種類を行った。主介助者、副介助者および患者役それぞれに心電図モニターを装着し、毎回2分間の安静後、各移乗動作を3回実施した。心拍数は移乗開始から約90秒間計測した。分析は、前後支持法と左右支持法のそれぞれについて、安静時の値を基準に、移乗中（約10秒間）、移乗直後（約20秒間）、移乗後（1分間）の変化量をみた。統計手法は一元配置分散分析、多重比較にはScheffe法を用い、有意水準は5%とした。倫理的配慮として、研究目的、方法を対象者に説明し同意を得た上で、実験は安全に留意し行った。なお、久留米大学倫理委員会にて承認を得た。

【結果】

前後支持法における主介助者の心拍数は、平均92.04±6.91回/分、副介助者は79.37±7.05回/分、患者は72.86±11.24回/分であった。左右支持法では、主介助者は90.84±6.9回/分、副介助者は80.27±7.84回/分、患者は74.19±9.48回/分であった。変化量については、両方法において、主介助者、副介助者ともに、安静時に比べ移乗中に有意な増加がみられた。移乗直後は、主介助者においては左右支持法で、副介助者においては前後支持法で有意な増加が認められた。移乗後1分では両方法において主、副介助者とも安静時の値に戻っていた。患者役においては、両方法とも移乗中には心拍数の増加はみられず、移乗直後に左右支持法において有意な増加が認められた。移乗後1分では、いずれも有意に減少していた。

【考察】

複数人で介助を受けた患者役の心拍数の変化において、左右支持法は、移乗直後に増加していたことから、患者にとっては前後支持法より身体的負担があると考えられた。しかし、移乗後1分程度で安静時の状態に戻っていたことから、それほど大きな負担を負わせる動作ではないと考える。看護師にとっては、移乗中に心拍数の増加が認められたが、前後支持法と左右支持法は同程度の負荷と考えられた。以上より、これら2種類の方法は、患者の心機能に応じて使用可能な介助方法であると考えられた。この取り組みは、平成26-29科学研究費助成事業（基盤研究（C）課題番号26463227）の助成を受けて行った。

正

46) 複数介助者で実施する車椅子移乗方法の検討 —第二報

中山麻由¹，○加悦美恵¹，森本紀巳子¹
¹久留米大学医学部看護学科

【目的】

我々は、これまでに介助者二人で療養者をベッドから車椅子へ移乗する方法を検討してきた。今回は、移乗時の心拍数の変化から身体的負担の少ない方法について考察する。

【方法】

対象は、患者役を女子看護大学生11名、介助者役は女性看護師8名とし、看護師は二人一組となって複数回実験に参加した。データは11回組分を収集した。方法は、二人の看護師が主介助者、副介助者となって、自力で立てない患者を端座位から車椅子へ移乗する場面とし、患者を前後から支える前後支持法と、患者の左右両側から支える左右支持法の2種類を行った。主介助者、副介助者および患者役それぞれに心電図モニターを装着し、毎回2分間の安静後、各移乗動作を3回実施した。心拍数は移乗開始から約90秒間計測した。分析は、前後支持法と左右支持法のそれぞれについて、安静時の値を基準に、移乗中（約10秒間）、移乗直後（約20秒間）、移乗後（1分間）の変化量をみた。統計手法は一元配置分散分析、多重比較にはScheffe法を用い、有意水準は5%とした。倫理的配慮として、研究目的、方法を対象者に説明し同意を得た上で、実験は安全に留意し行った。なお、久留米大学倫理委員会にて承認を得た。

【結果】

前後支持法における主介助者の心拍数は、平均92.04±6.91回/分、副介助者は79.37±7.05回/分、患者は72.86±11.24回/分であった。左右支持法では、主介助者は90.84±6.9回/分、副介助者は80.27±7.84回/分、患者は74.19±9.48回/分であった。変化量については、両方法において、主介助者、副介助者ともに、安静時に比べ移乗中に有意な増加がみられた。移乗直後は、主介助者においては左右支持法で、副介助者においては前後支持法で有意な増加が認められた。移乗後1分では両方法において主、副介助者とも安静時の値に戻っていた。患者役においては、両方法とも移乗中には心拍数の増加はみられず、移乗直後に左右支持法において有意な増加が認められた。移乗後1分では、いずれも有意に減少していた。

【考察】

複数人で介助を受けた患者役の心拍数の変化において、左右支持法は、移乗直後に増加していたことから、患者にとっては前後支持法より身体的負担があると考えられた。しかし、移乗後1分程度で安静時の状態に戻っていたことから、それほど大きな負担を負わせる動作ではないと考える。看護師にとっては、移乗中に心拍数の増加が認められたが、前後支持法と左右支持法は同程度の負荷と考えられた。以上より、これら2種類の方法は、患者の心機能に応じて使用可能な介助方法であると考えられた。この取り組みは、平成26-29科学研究費助成事業（基盤研究（C）課題番号26463227）の助成を受けて行った。